

東洋文庫

212

平凡社

沖繩童謡集

島袋全發

しまぶくろ ぜん はつ

島袋全發

明治21年那覇市生、昭和28年
没。京都帝大法学部卒(大正3年)。主要著書 本
書のほか『那覇変遷記』(昭和5年)。主要論文「お
もろさうしの読み方—展読法の研究」(昭和8年)。
なお昭和31年、遺稿刊行会から『島袋全發著作集』
刊行。

沖縄童謡集

東洋文庫 212

昭和47年6月30日 初版第1刷発行

著 者 島袋全發

東京都千代田区四番町4番地

発行者 下中邦彦

発行所

郵便番号 102

東京都千代田区四番町4番地

振替・東京 29639

株式会社 平凡社

落丁・乱丁本はお
取替えます

印刷 東洋印刷株式会社
製本 株式会社 石津製本所

© 株式会社 平凡社 1972

0192-802120-7600

例 言

一、本書は、島袋全發著「沖繩童謡集」、昭和九年、一誠社（東京）刊の覆刻版である。

二、覆刻にあたって当用漢字を用いたほかは、固有語の表記を保存するため、用字用語等すべて原書のままとした。

三、ただし、明白な誤字・誤植は訂正した。

四、人名・地名その他の難読字に新たに振り仮名を付したところがある。振り仮名は他の部分との整合をはかって歴史的仮名づかいによった。

序に代へて

トーヤーマーの語源は「唐ヤ何方」

一

雑誌「方言」(第一卷第三号)所載柳田国男先生の「音訛事象の考察」中に、蚕蛹の方言西何方^{にしどっ}、ニシャドッコ、西向け東向け等は、殆ど全国的に分布して居て、元はこの遅鈍な動物に向つて、京の方角を尋ねた子供遊びの名残だと考へられる、といふことが見えてゐるが、之に相当する琉球語のトーヤーマーも、この種の小動物に向つて、唐の方向を尋ねた、子供遊びの名残で、しかも那覇市には、其時に唱へる童謡まで遺つてゐる。

もう廃れたかも知れないが、私の子供の時分には、夏の初め頃だつたか、土中で化して出て来た、長さ三分位の褐色の小虫をつかまへて、よくさういふことをしたものだ。尾部を指で摘むと、逃げようとして、頭を機敏に左右に揺がすので、それにつれて、

トーヤーマーガ、トーヤーマー、

ヤマトー マー ガ、ヤママーヤー。

と謡つたが、唐は何方だ、トーヤーマー、日本やまとは何方だ、ヤママーヤー、といふ程の意味で、上の句を謡ひ終ると、すぐ支那の方角に向き、下の句を謡ひ終ると、すぐ又日本の方角に向く、といった調子で、この小動物が、如何にもこちらの問ひに応へてくれるらしいところを興がつたのである。琉球の両属政策は、かうした子供遊びや童謡などにも反映したのであつた。

トーヤマーガ（唐は何方か）は、疑問辭の「ガ」を略して、トーヤマー（唐は何方）ともいふから、これがやがてトーヤーマーに転じて、その名称になつたに違ひない。だが、ヤママーヤーは、ヤマトーマーガ（日本は何方か）を承けて、頭韻法にする為に出来た、意味のない音群で、山猫ヤマヤイを聯想させるものだが、トーヤーマーの同義語として、口語中に存在してゐるのではない。序に言ふが、「ヤ」といふ格助辭は、國語の「は」の転訛したもので、主として首里市及びその周囲の方言では、長母音で終る語の下に付く時は存在するが、短母音及び「ン」で終る語につゞく時には、融合して屈折インフレクションのやうになつてゐる。トーヤ（唐は）ウチナーヤ（沖縄は）は前者の例で、ヤマトー（日本は）イノー（犬は）は後者の例である。但、古風の老人達は、いまだに後者をヤマトウヤ・インヤといつてゐるが、他の方言には、古形を保存したのと変化したのがある。これは後に出す國頭方言くにがみの例を見てもわかる。

私たちはこの小さい虫をトーヤーマーと呼んでゐたが、これは小野蘭山が『本草啓蒙』中に説明した「西何方」(蟬^{にしどち}〓ちむし又はねきりむし)とはかなり違つてゐるやうに思はれる。それは兎に角、この語は最初例の小虫を指していつたのが、いつしか蛹の通称となり、遂に蚕蛹にのみ縮用されるに至つたのであらう。

思ふに、この造語法と西何方等のそれとは、決して偶然の一致ではなく、全く同一系統に属するものに違ひないが、たゞ異なる点は、明初以来支那^{タウ}に興味を有ち、支那を崇拜するやうになつた琉球で、西が唐にすげ替へられ、従つて東が日本^{ヤマト}にすげ替へられた所に在る。

柳田先生は、蚕蛹の方言には、別にニシピッカリがあるところから、西何方の西は西方寂光浄土を意味して居たもので、少くとも人が西方に興味をもち、又西方を愛慕する者の尚多かつた時代に、この遊戯の創始せられたことは確かだ、といはれたが、この遊戯と名称とが、いつ頃どうして南島に輸入されたかに就いては、文献の徴す可きものがない。

二

トーヤーマーの語源を「唐ヤ何方^ア」だと断言した私は、それに相当する首里方言が、トーヤー^マだ、と聞かされて、都合の悪い例外だと思つたが、おもむろに音韻変化の法則を斟酌

して考へたら、それもやがて例外ではなくなり、しかもそれを吟味していくうちに、その首里方言に這入つた経緯まで略々わかつて来た。トーマユーは、語源はともあれ、トーマヤー（唐猫）の転訛らしくも見えて、幾分親愛の言語情調が伴ふが、兎に角古くマヤー（猫）をマユといったことは、組踊に「犬猫の餌食^{エシキナ}為たらてやりと思は」（女物狂）又は「如何^{イカヤ}し犬猫の虎の前に寄ゆが」（忠臣身替）とあるのでも知れる。それは又八重山其の他の方言にも見出される。現今の首里那覇の方言でも、一目散に走るのを形容して、マイ ヌ ハイネー（猫の走るやう）といふが、このマイは、マユが今一段転訛して、形が崩れた為に、若い人達の語感には、魔物の義に響くやうになつてゐる。

だが、数百年の間、南島の標準語であつた首里語のトーマユーが、可愛らしい唐猫の義に解せられてゐるからといつて、那覇方言のトーマーを其の訛つたものと速断するわけにはいくまい。首里語が各方言に及ぼした影響は、勿論無視してはいけなないが、各方言を悉く首里語の訛つたものと考へるのは妥当でなく、原形が首里語に失はれて、他の方言に保存されてゐる例も数多い。

新井白石は、東雅の序説に「古今の言に相通じなむ、まづ其世を論ずべき事なり」と喝破したが、此語の伝播の跡を辿るにも、まづ首里語の歴史を一瞥する必要がある。西暦一一八七年から一四〇五年迄の二百十九年間、琉球に君臨した舜天・英祖・察度等は、浦添の人で

あつたから、浦添方言の首里語に及ぼした影響も考へなければなるまい。それから、西暦一四八七年迄の六十六年間に、首里に都した第一尚氏の発祥地佐敷の方言の首里語に及ぼした影響も、軽視す可きではない。早い話が、最も保守的だと言はれるアクセントの点から見て、同方言が首里市の周囲の方言よりも、却つて首里語に近いことだ。なほ又第一尚氏が亡びして王朝を一新した、第二尚氏の第三世尚真王の中央集権によつて、各邑落から「首里親国」に移住させられた「百按司」の方言の影響なども看過してはならない。首里語はつまりは各方言から単語其他を撰取して、肥太つたのだから、かうしてリファインされた語彙の、わけでも文化的語彙の、この四百年間に、諸方言に夥しく流入したことは、争へない事実である。今一つ、古来唯一の貿易港であつた那覇の方言が、鎌倉時代以後輸入された、大和言葉を咀嚼して、首里語に貢いだ経緯なども、念頭に置く必要がある。文語は無論文学を通じて直接「親国言葉」に這入つたと思ふが、口語は一旦那覇方言に這入つて、伝播したと思つたら大過なからう。

左に、国語の輸入された経緯を少しく述べて置きたい。鎌倉期から室町期にかけて、大和及び筑紫との交通が頻繁になつて、日本文化の南漸したことは、琉球史及び神歌オモロの語る所であるが、正徳三年（西暦一七一三年）了道・際外・蘭田等の僧侶によつて編纂された『諸寺重修記並造改僧縁由記』に、中央集権直後の尚清王時代の円覚寺の住職中に、五山の僧が二

人もあり、しかも同書に「由五山之佳例云々」の文句があるのを見たら、思半ばに過ぐるものがあらう。なほまた第二尚氏の勃興当時から、島津氏の琉球入迄の五代の間、一代に二三回宛薩摩に派遣された使節のいづれもが僧侶であつたのも注目値ひする。彼等の多くは、数年若しくは十数年も、日本に留学したものであつたから、日本文化の輸入者であつたことは言ふまでもなく、鈔物などに出てゐる室町期の国語で、日本内地ではとうの昔廢語となつたものが、今尚南島諸方言で使用されてゐるのは、彼等によつて輸入されたと見ていゝ。といふのは其頃彼等の漢字が久米村人のそれを压倒して、和訓が棒読みにつけて代つたからだ。彼等が談話中に、ちよい／＼国語を混せてゐたことは、二百年前の劇作家玉城朝薫の作「執心鐘入」と「女物狂」とに出て来る僧侶の詞を見ても領かれよう。そこには又同じ頃、日本の為政者や記録家の知らぬ間に、七島灘を越えて移住した千秋万歳を祝する下級宗教家の群もあつた。彼等の子孫は万歳又は行脚アンギと称して、首里郊外の安仁屋アンニヤといふ部落に住して居るが、俗に京太郎チヨンダラと呼ばれてゐる。行脚アンギは後にアンヂャに転じ、ヤンヂャと訛り、その対語万歳アンロジの類推で、ヤンザイになつたが、更にヤンザヤとなつて、賤民といふ言語情調を伴ふに至つた。彼等は半世紀前までは、春の初に家々を訪れて、祝儀の歌舞をしてゐたから、其の詞曲集中の大和言葉の、漸次琉球語中に入れたとも、考へられ得ることである。室町時代の末頃には、これらの外に、日本の儒者・僧侶・茶坊主及び商人の渡海する者があり、那覇市の

旧家の家譜を調べて見ると、帰化した者も、少く無かつたことが知れるから、その言語はもとより、民間伝承や俚歌童謡の輸入されたことも、容易に推測される。試みに、これらの人によつて輸入された室町期の国語で、今尚南島で使用されてゐる二三の例を挙げて見よう。

畏友橋本進吉博士の名著『吉利支丹教義の研究』中に「ようじよ」といふ語が出てゐる。博士は、原本八九頁と九〇頁とに見えてゐる、「其の上夫婦互に一身の如く、思ひ合ひ、ようじよあらん時、力を添へ合はさんが為なり」や「其の外何たるようじよあらん時も、互に便となる事あるべからず」の「ようじよ」を、巻末の語彙の葡萄牙訳によつて「用事」と同義と思はれるといひ、我国の辞書には全く見えないが、実例としては高麗陳掟に「一里／＼にはやみち二人つゝをき候て、名護屋と大阪との用所早速相叶やうに可有之」とあるのと、万治二年版の百物語巻上(二十二)に「ある人のつかひし者に、きやうかるうつけありけるが、大雪のふりける折ふし、用所ありてつかひにやるに彼もの申すやう」とあるのを見ただけである、と言つて居られる。この用所が、ユージュといふ形となつて、南島のあらゆる方言で、用事の意に使はれてゐるのは、注目すべきである。今一つ、同書に、「にんじゆ」(人数)は「人達」「人々」の意味で、現在の「人数」とは別義である。と見えてゐるが、これなども南島では、いまだに「人達」「人々」の意味で使はれてゐる。組踊(戯曲)に、「揃て居る人数出やうれ／＼」とある「人数」は「人々」の義で、口語で能く使ふ「幾人^{イクタイニシ}人

数^{ジユ}」は、「有数の人々」の義である。但、現在の国語の「人数」の義に用ゐられることもある。それから、琉球内裏言葉の辞書『混効験集』（清の康熙五十年編纂）に、「ばし、杯^{たど}の心か。又のっこい（今はナックエーと訛つて冷笑の言語情調が伴つてゐる）」と云ふ言葉にもかなふにや。和歌にも、えたりとてじまんばしすな数奇の道寸善尺魔ものごとにより、と茶道の書にみえたり」とあり、組踊にも、「母と思^{オモ}弟や氣遣^{ケイ}ばしするな」（孝行の巻）「慇懃な谷茶巧^{たんちやたく}で居る事の便りばしと思^{オモ}て」（大川敵討）とあるがこの「ばし」といふ助辞の用法も、大方室町期のそれに似通つてゐる。これは現今の沖縄方言には見出せないが、鬼界島の方言では、いまだに「雨ばし降らんば苗や枯れちや」などと使はれてゐる。この外にもまだ沢山あるが、それらは、兎に角前記の人々によつて輸入されたと見なければなるまい。

首里語のトーマユーも、かうした径路を取つて這入つたものゝ転訛と見ていい。例の童謡が、かつて首里で謡はれたかどうかは判然しないが、多分謡つてゐるうちに、いつしかトーマーがトーマーヤーに變じ、更にトーマユーと訛つたに違ひない。琉球語にも、イービガニー（指金^{指輪}郎）がイービナギーとなり、ネーグー又はネーガー（蹇）がグナーとなり、平久保（八重山^{地名}）がペーバグとなつたやうな隣音交換は、盛に行はれてゐるから、それと同一の音変化と見て差支あるまい。或は又、童謡の下句の終りに出て来るヤママーヤーの類推で起つた音変化とも見られる。

不図、尚泰侯の近侍であつた、山内盛熹翁の遺稿『南島八重垣』(首里語の辞書の未定稿)を繙いて、「トウヤマー、蛹也」とあるのを見付けたので、卑説がいよ／＼確実性を帯びて来たことを喜んだが、首里出身の二三の学生からも、自分達はトーマユーとはいはないで、やはりトーマーといつてゐる、と聞かされて、トーマユーが所謂「親国言葉」であることを知つた。トーマーが、トーマヤーに変じて、唐猫トーマーの義に解せられ、更にトーマユーに変じて「可愛らしい」といふ言語情調を件ふに及んで、原義の全く忘れられたことは、最早疑ふ余地がない。でも、之を決定する為には、他の方言等に現れた形式と意義とを調査して比較する必要がある。

三

其後、郷里の人に会ふ毎に、蚕蛹の方言に就いて質問し、なほ書面で問合せなどして、沖縄島の南半中頭島尻なかがみしまじりの二郡は、那覇市と殆ど同一であることを知つた。但、少し毛色の変つたのは、久米島のサトゥマーで、里は何方の義だが、この里はむしろ「いとしい人」の義に解す可きものであらう。

最近、沖縄島の北部国頭郡くにがみ出身の島袋源七君に会つた時、同じ質問をしたら、同君の郷里

今^な帰^{きん}仁村では、トーダーガーといつてゐて、それには「唐^どは何^ど方^ちか」の義があり、この小虫の頭部をつかまへて、

トーダーガー、ヤマトーダーガー。

と唱へつゝ、小虫が尻つぽを振り、交々例の方角を示すのを見て、面白がる子供遊びのあることも知つた。たゞ那覇のと異なる点は、尻部の代りに、頭部をつかまへることで、遊戲に童謡の伴ふあたりは略々似てゐる。国頭郡の大部分の方言では、ダーには「何処」の義があるから、トーダーガーに「唐は何方」の意味のあることは、いふまでもなく、初めてトーヤーマーといふ語が輸入された時、早速之を各自の方言に翻訳して、使用したのを見ると、當時この意味のはつきり缺つてゐたことは明かである。同郡名護^{なご}町の祖慶良信君の報告で、名護村及び其の北隣りの羽地^{はねぢ}村の川上^{かはかみ}其他の字でも、やはりトーダーガーといつて居り、

トーダーガ、ヤマトーダーガ。

と謡ひつゝ、小虫の尻部の振り方で、「唐だ」「大和だ」といつて、打ち興ずる子供遊びのあることも知つた。今一つ、同郡大宜味^{おほぎみ}村の大山一雄君の報告にも、大宜味村では、トーヤーマーガ（唐は何方か）で、同村の方言では、ダーはチャーに変じてゐるから、トーチャーガーといひさうなものだが、チャーは語呂が悪いので、首里那覇方言のマーに代へたのであらう、といふことがある。そこでもやはり、子供等が

トーヤ マーガ、ヤマトーマーガ。
 と謡ひつゝ、虫の尾部をつかまへ、首の向いた方角を見て「唐だ」「大和だ」といつて、興がるとのことだ。

もうこれだけでも、国頭郡に於ける分布状態は、略々推測することが出来るが、なほ念のため県立第三中学校の仲宗根政善君に、その調査方を御依頼した。同君は居合せた生徒百二十名（内他郡の者は僅に六名）について調査して下さつたが、幸に各村から来た生徒を網羅してゐるので、比較的好結果を収めることが出来た。煩を厭はず、列記して見よう。

今帰仁村には、トーダーガー（勢理客・謝花・仲宗根・玉城・天底・与那嶺・古宇利島）
 とトーラーガー（今泊・兼次・諸志・与那嶺・仲尾次・平敷・崎山）との外に、トーマーガ
 ー（運天・湧川）のあることがわかつたが、意外にも運天港の沖に横はる古宇利島に、
 イリダーガー、アガリダーガー。

といふ童謡のあることを知つた。これは言ふまでもなく「西何方、東何方」の意である。今帰仁は昔北山王国の首府のあつた所で、北山滅亡後も、久しく中山の監視が駐在し、しかも祭祀などの関係で、其後も中央との交渉が密接であつたから、夙に原形が這入つて、この神秘の小島に保存されたのか、その辺は判然しないが、虫の名はやはりトーダーガーになつてゐる。

今帰仁の隣りの本部村にも、トーダーガー（並里・伊野波・浦崎・瀬底島）とトラーガー（渡久地・具志堅・謝花・伊野波・屋我地島の辺名地）とトーマーガ（並里・浦崎・桃原屋取・渡久地・谷茶）とがあり、トーマヤーガ（渡久地）とトーマーガー（渡久地）もある。そして今一つ、トーマーガー（渡久地）もある。其処にも亦

トーダーガ、ヤマトーダーガ。

といふ童謡があるが、名称に小異があるだけ、それだけ童謡にも、小異があるわけだ。そして辺名地、健堅のは「トーマーヤガ、ヤマトウマーヤガ」だが、前者は後に「言ヌンサバ免ラスン」をつけ、後者は後に「指サバヌガーラスン」を付ける。本部は今帰仁と共に半島の大部分を形成してゐる所で、その西北海岸の今帰仁に近い所には、桃原屋取があるが、この部落民は、百年前那覇から移住したものゝ子孫で、知識の程度比較的高く、経済的にもこの半島を支配してゐるから、本部・今帰仁にトーマーガー又はトーマヤーガがあり、

トーマーガー、ヤマトーマーガー。

の童謡があるのは、専らその影響と思はれる。私はかつてこの部落民のアクセントを特に注意して聞いたことがあるが、第二世のは那覇七分本部三部で、第三世のは殆ど本部のものになつてゐた。かうした現象は、他の方言の場合にも見られるが、これらの屋取は、いづれも所謂「言語の島」である。

この半島を七海里ほど西に離れた沖に、伊江島がある。トーダーガーがあつて、童謡は本部のと同ーだが、終りにウチニヤーダーガー（沖縄何方か）が付いてゐる。

半島の続きには、羽地の平野が広がる。そこのは大体今帰仁のと一致して、トーダーガー（川上・真喜屋・稲嶺・振慶名・呉我・仲尾次・田井等・仲尾・屋我地島の運天原・饒平名）とトーラーガー（仲尾次）とトーヤーダーガー（源河）とであり、外にトーマーガー（稲嶺・屋我地島の済井出・饒平名）もある。童謡は本部のと同様だ。

其の南隣りで、本部・今帰仁に接する名護村には、トーダーガー（大兼久・東江・城・宮里・世富慶・数久田・宇茂佐・安和・屋部・柳）とトーラーガー（東江・宮里・宇茂佐・屋部）とがあつて、童謡は右と同様だが、終りにウチナーダーガ、チブルフィフィ（沖縄何方頭振りく）がついてゐる。トーマーガー（許田・安和）或はトーヤマーガー（喜瀬・幸喜・山入端・安和の猫川原）もあつて、

トーヤマーガ、ヤマトーマーガ。

も謡はれる。

其の南隣りで、中頭郡に接する恩納村には、トーラーガー（安富祖）とトーヤマーガー（名嘉真）とトーヤマー（恩納・安富祖・熱田）とがあるが、安富祖では、童謡は

トーヤマーガ、ヤマトーマーヤガ。